

『平家物語』と薩摩塔

海商船と南九州

田中史生

“Heike Monogatari” and Satsuma-tō: Chinese Merchant Ships and South Kyushu

TANAKA Fumio

はじめに

① 覚一本系『平家物語』と「商人船」「もろこし船」

② 『平家物語』諸本の検討

③ 薩摩塔の分布とその背景
むすび

【論文要旨】

かつて通説的位置を占めた平安期の「荘園内密貿易盛行説」が否定されて以降、文献史学では、平安・鎌倉期における南九州以南の国際交易は、国際交易港たる博多を結節点に国内商人などを介して行われたとする見方が有力となった。考古学も概ねこれを支持するが、その一方で、古代末・中世前期に宋海商が南九州に到達していた可能性をうかがわせる資料もいくつか提示され、これらを薩摩硫黄島産硫黄の交易と関連するものとする見解も示されている。本稿の目的は、こうした考古学などの指摘を踏まえ、あらためて文献史学の立場から、古代末・中世前期において宋海商が九州西海岸に南九州、南島へと向かった可能性について考察するものである。そのために本稿では、南九州における硫黄交易のあり方を記した軍記物語として近年注目されている『平家物語』の諸本の、「鬼界が島」（薩摩硫黄島）と外部との交通に関する記述について検討した。さらに、『平家物語』の成立期と時代的に重なり、中国との

関連性も指摘されている九州西部の薩摩塔と、その周辺の遺跡についても検討を加えた。その結果、次の諸点が明らかとなった。(一) 古代末・中世前期において、博多に來航した宋海商船のなかに、南九州に寄港し、そこから南島を目指すために九州西海岸海域を往還する船があった可能性が高い。(二) 彼ら宋海商の中心は日本に拠点を築いた人々であったと考えられる。(三) 宋海商の交易活動を支援する日本の権門のなかに、博多や薩摩に寄港し南島へ向う彼らの船を物資や人の運搬船として利用するものもあつたとみられる。以上の背景には、薩摩と南島を結ぶ航路が、一般国内航路とは比較にならない困難さを伴っており、外洋航海に長けた渡来海商の船が求められていたこと、また宋海商にとっても硫黄を含む南島交易は対日交易の大きな関心事となっていたことがあつたと考えられる。

【キーワード】 『平家物語』 薩摩塔 宋商人 南九州 硫黄

はじめに

古代・中世前期の九州南部の海上交通・交易に関し、その実態を伝える史料は乏しい。こうしたなか、筆者は以前、文献史学の立場から古代の南島（南西諸島）関連史料を検討し、琉球列島の考古学的知見も踏まえつつ、平安期は北部九州で活動する渡来海商を含む国際交易者が南島との交易に直接関わっていたこと、またそこでは南九州も重要な役割を果たしていたことを指摘した^①。けれども文献史学では、平安・鎌倉期の南島交易と渡来海商の結びつきは、博多を介した間接的なものにとどまったとする見方も有力である。例えば、日宋貿易において一〇世紀末以降、鹿児島県硫黄島の硫黄が日本から輸出されたことを明らかにした山内晋次氏は、一二世紀末にあっても硫黄は「国内商人の船」で九州西海岸を通り博多までもたらされ、博多の港から「宋海商の船」に積まれて中国へ輸出されたと説明する^②。また渡邊誠氏も「中国式の大型外洋船であるジャンク船は、中国大陸と北部九州の博多を結ぶ東シナ海航路の輸送・交通を担うもの（その他、十世紀末から十二世紀前半までは山陰・北陸方面への来航がある）」とし、「国内航路は平安・鎌倉期の全期を通じて、和船の貨物船が用いられた」と述べる^③。こうした見解は、平安期の「荘園内密貿易盛行説」が否定されたことや、平安後期・鎌倉期も博多が国際流通と国内流通をつなぐ結節点・集散地であったことが文献史学・考古学両面から明らかとされたことなども密接に結びついている^{④⑤}。

けれども一方で考古学からは、貿易陶磁に加えて薩摩塔・宋風獅子・寧波系瓦など、古代末・中世前期の宋海商と南九州との直接のかかわりを示唆する資料がいくつか提示され、これらを硫黄交易と結びつけて理解する説も提起されている^⑥。またこうした考古学の知見を受けて、文献

史学からも榎本渉氏が「博多―慶元ルート沿い以外でも宋海商の活動があったことは、もはや否定し難い」とし、一二六二年に禪僧無関玄悟（普門）が慶元から「薩摩河野部」に到った例を博多―慶元ルートを離れた史料上の唯一の事例とし（『本朝僧宝伝』）、海商船が博多―慶元のサブルートとして薩摩の地に入ることはありえたらうとの見解を示している^⑦。筆者は、博多での交易を終えた海商船や博多居留の中国系商人の船が南島へ向かったとみるならば、近年の研究が明らかにした平安期の貿易のあり方や博多の位置づけ、九州における渡来遺物の出土状況とも矛盾しないと考える^⑧。

そこで本稿では、上記の筆者の問題関心に基づき、近年、硫黄交易の姿を描くものとしても注目されている『平家物語』、及び九州西部に分布し中国石塔との類似性が指摘される中世の薩摩塔について検討し、古代末・中世前期において宋海商の船が九州西方海域から南島へ向かった可能性についてあらためて考えてみたいと思う。

① 寛一本系『平家物語』と「商人船」「もろこし船」

山内晋次氏が、硫黄交易において南九州から博多への運搬を担う「国内商人の船」と、博多から中国への搬出を担う「宋海商の船」を区別した史料の根拠は、安元三年（一一七七）の「鹿ヶ谷事件」で「鬼界が島」へ配流となった俊寛・平康頼・藤原成経をめぐる『平家物語』の記述にある。キカイガシマは一二世紀に異国として位置づけられ、大隅諸島を中心とする「端五島」と吐噶喇列島に比定される「奥七島」の一二島をキカイジマと呼ぶこともあったが、俊寛らが配流された「鬼界が島」は「端五島」に属する鹿児島県三島村の硫黄島のことを指す^⑨。山内氏が特に注目した『平家物語』の記述は、「鬼界が島」に関し「山にのぼって湯黄と云物を取り、九国よりかよふ商人にあひ、くひ物にかへなんどせ

しか共」(卷三・有王)とあること、流人の三人のもとへ有明海沿岸部の肥前国鹿瀬庄から常に衣食の供給があったとすること(卷二・康頼祝言)、また赦免を被った平康頼・藤原成経が「鬼界が島」から鹿瀬庄に到り、「浦づたひ島づたひ」して備前の児島に到ったとすること(卷二・少将都帰)などである。これらから、薩摩硫黄島産の硫黄が国内商人によって九州に搬出されたことや、硫黄島から九州西岸を北上し博多へつながる航路が存在したことが判明し、硫黄もこの航路で博多まで運ばれていたとする。

そこで本稿でも、『平家物語』から「鬼界が島」の島外交通に関する記述を抜き出した上で、その内容を検討してみたいと思う。なお、山内氏が分析に用いた『平家物語』のテキストは、岩波書店の『新日本古典文学大系本』¹⁰、ここでもまずはそれに従う。新日本古典文学大系本の底本は東京大学国語研究室蔵本(高野辰之氏旧蔵)で、一三七一年成立のいわゆる「覚一本」に属する伝本である。また、「二」く「八」として抜き出した以下の記述のうち、特に以後の検討で用いる部分については便宜的に丸番号と傍線を付す。

〔二〕〈卷二・大納言死去〉

さる程に、法勝寺の執行俊寛僧都、平判官康頼、この少将相ぐして、三人薩摩濁鬼界が島へぞ流さりける。①彼件の島は都を出てはるぐくと、浪路をしのいで行所也。おぼろげにては舟も通はず、島にも人まれなり。をのづから人はあれども、此土の人にも似ず、色黒うして、牛の如し。身には頬に毛おひつ、云詞も聞知らず。男は烏帽子もせず、女は髪もさげざりけり。衣裳なければ人にも似ず。食する物もなければ、只殺生をのみ先とす。しづが山田を返せねば、米穀のるいもなく、園の桑をとらざれば、絹帛のたぐいもなかりけり。島のなかには、たかき山あり、鎮に火もゆ。硫黄と云物みちみ

てり。かるがゆへに硫黄が島とも名付けたり。いかづち常になりあがり、なりくんだり、麓には雨しげし。一日片時人の命たえてあるべき様もなし。

〔二〕〈卷二・康頼祝言〉

さるほどに、鬼界が島の流人共、露の命草葉の末にかゝつて、おしむべきにはあらね共、②丹波少将のしうと平宰相の領、肥前国鹿瀬庄より、衣食を常にをくられければ、それにてぞ俊寛僧都も康頼も、命をいきて過ごしける。

〔三〕〈卷三・赦文〉

去程に鬼界が島の流人共、召しかへさるべき事定められて、入道相国赦文下されけり。御使すでに都をたつ。宰相あまりのうれしさに、③御使に私の使をそへてぞ下されける。よるを昼にして急ぎ下れとありしか共、心にまかせぬ海路なれば、波風をしのいで行程に、都をば七月下旬に出たれ共、長月廿日比にぞ、鬼界が島には着にける。

〔四〕〈卷三・足摺〉

④彼松浦さよ姫が、もろこし舟を慕ひつ、ひれ振りけんも、是には過じとぞ見えし。

〔五〕〈卷三・御産〉

去程に、⑤此人々は鬼界が島を出て、平宰相の領、肥前国鹿瀬庄に着給ふ。宰相、京より人を下して、「年の内は波風もはげしう、道の間もおほつかなう候に、それにて能々身いたはって、春になつて上り給へ」とありければ、少将鹿瀬庄にて年を暮す。

〔六〕〈卷三・有王〉

いとまをこふ共よもゆるさじとて、父にも母にもしらせず、⑥もろこし船の纜は卯月・五月にとくなれば、夏衣たつを遅くや思けん、弥生の末に都を出て、⑦多くの浪路を凌ぎつ、薩摩濁へぞ下りける。薩摩より彼島へわたる船津にて人あやしみ、着たる物をはぎとりなどしけれ共、すこしも後悔せず。姫御前の御文ばかりぞ、人に見せじとて、もとゆひの中に隠したりける。さて⑧商人船に乗つて、件の島へわたつて見るに、都にてかすかにつたへ聞しは、事の

〔七〕〈卷三・有王〉

此島には人のくひ物たえてなき所なれば、身に力の有し程は、⑨山にのぼつて湯黄と云物を取り、九国よりかよふ商人にあひ、くひ物にかへなんどせしか共、日にそへてよほりゆけば、今はその態もせず。

〔八〕〈卷三・僧都死去〉

白骨をひろひ頸に懸け、⑩又商人舟のたよりに、九国の地へぞ着ける。

これら抜き出した記述の場面について少し説明しておく、〔一〕は三人の配流された「鬼界が島」の様子、〔二〕は流人のもとへ平教盛領の肥前国鹿瀬庄から衣食が供給されていること、〔三〕は平康頼・藤原成経二名の救免を伝える御使と平教盛の私使が「鬼界が島」へ渡島したこと、〔四〕は「鬼界が島」に一人残されることになった俊寛が去りゆく船を招き返そうとする様子、〔五〕は救免の平康頼・藤原成経が「鬼界が島」から鹿瀬庄に到着したこと、〔六〕は俊寛の侍童であった有王

が都から「鬼界が島」へ向かったこと、〔七〕は「鬼界が島」で有王に出会った俊寛が語った言葉、〔八〕は有王が亡き俊寛の遺骨を抱えて「鬼界が島」より九州へ渡ったことが、それぞれ記されている。

さて、①③によって、覚一本系の『平家物語』は「鬼界が島」を、波風の荒い海で遠く隔てられ、時季を待たねば船の往来も困難な島と認識していたことがわかる。また、⑨によって「鬼界が島」では九州から商人が通い、硫黄を交易していたこともわかる。

ここで筆者が注目したのは、④に「もろこし舟」が登場することである。これは、『万葉集』巻五・雑歌に、「蕃国」へ向かう大伴佐堤比古（狭手彦）の船を、肥前松浦の佐用姫が「高山之嶺」で「領巾」を振り、断腸の思いで見送ったとある伝説を踏まえたものである。^⑪「唐船」の諸史料について検討した渡邊誠氏は、平安・鎌倉期の「唐土船」「唐船」が和船と区別される中国的ジャンク式構造船であることを指摘し、④の「もろこし舟」についても、『平家物語』において想像された外洋船がジャンク式の構造船であったとする。^⑫本稿もこの見解に基本的に従い、「唐船」は和船とは異なる中国的な船とみる。

ただしそうになると、『平家物語』は、俊寛と船の様子を具体的にイメージさせるために、朝鮮半島へ向かう外洋船を遠望する「さよ姫」伝説を選び出し、しかもその船をわざわざ「もろこし舟」と言ったのだから、御使を乗せて流人二名を「鬼界が島」に迎えた船は、この場面において外洋航海に長けた中国的な船のイメージが重ねられていたことになる。しかもその船で島を出た一行は、有明海北部沿岸の嘉瀬川河口部、佐賀市嘉瀬町付近に想定される肥前国鹿瀬庄に到達する。

渡邊氏が用いた『平家物語』も、引用文からみて覚一本系のテキストとみられるが、この場合もう一つ問題となるのは、⑥において有王が「鬼界が島」へ向かう手段として「もろこし船」を利用しようとしたとあることである。新日本古典文学大系本の脚注は、この「もろこし船」

を「中国との貿易に当たった船。摂津の和田泊から瀬戸内海を経て九州に至り、南海を経由して中国へ渡航する船便。それに便乗しようとしたが、出航を待ちきれなかったのである」とする。「出航を待ちきれなかった」というのは、「もろこし船」の出航が「卯月・五月」（四月・五月）であるのに、有王が「弥生の末」（三月末）に都を出立したことによる。このため脚注は「夏衣たつを遅くや思けん」も「夏になるのを待ち遠しく思ったのであろうか」とする。一方、石井正敏氏は、有王の話は薩摩から「唐船」が出ていたと読めるとし、「説話的要素が強いとは言え、『平家物語』の記述は島津荘域に宋船が入港したことを示す史料として十分参考に値するだろう」とするが、そのように解釈した根拠は明確でない。¹³⁾

けれども「六」については、石井氏の解釈を妥当とすべきと考える。平氏政権の整備した摂津大輪田泊に関しては、山内氏が、平氏政権下における宋船来航はかなり限定され、以後一三世紀後半の宋朝滅亡までの記録も見当たらないことから、日宋貿易の拠点と評価する従来説は史資料的根拠が希薄だとし、むしろ西国の物流の大動脈たる瀬戸内海交通の拠点として位置づけるべきことを指摘している。¹⁴⁾これに従えば、有王の言葉の「纜は卯月・五月にとくなれば」に示される「もろこし船」の慣習的な動きが、大輪田泊の宋商船の姿を指しているとは考え難く、都を出た有王が最初の目的地とした薩摩から、四月・五月に「鬼界が島」方面へ向かう「もろこし船」への乗船を意図した言葉と読むのが良い。実際、『平家物語』巻二「阿古屋之松」は大宰府と都を片道一五日とし、『延喜式』主計式上は空荷の下りで都から大宰府までは一四日、府から薩摩国までは下りで六日と記すから、⑥を、薩摩から「鬼界が島」方面へ向かう「もろこし船」が四月・五月に出港するので、これに乗船するには夏に出立するのは遅いと思ひ、その一月ほど前に都を出た、と読んで矛盾がない。また後世の例であるが、一六〇九年の島津軍による奄美・

琉球侵攻も三月～四月である。すなわち物語の筋書きとしては、⑧で有王が薩摩で乗り込んだ「商人船」とは、⑥の「もろこし船」であったことが強く示唆されていると解すべきだろう。

以上のようにみると、覚一本系の『平家物語』において、「九国よりかよふ商人」の船と「もろこし船（舟）」、「国内商人の船」と「宋海商の船」を区別することは困難ということになる。むしろ「鬼界が島」と「九国」を行き交う「商人船」に、「もろこし船」、すなわち宋海商の船が含まれることが前提とされていたと読む方が自然なのである。また⑤にあるように、「鬼界が島」から鹿瀬庄に到った赦免者は、季節的に大陸の旅が辛いことを理由に、すぐに上京せずに年明けまでここに留まった。したがって、年明けに彼らがあらためて用いた船を、「鬼界が島」から乗ってきた船と同船とすることもできない。つまり「鬼界が島」と「九国」を往還した船は、赦免者の鹿瀬庄到着以後の動きとは区別しなければならず、このままでは、その船が博多へ向かったかどうかもわからない。もしこれがすでに唐物交易を終えて博多を出た「もろこし船」だとすると、博多には戻らず、五島列島を経由して中国へ向かう可能性も否定できないからである。また、これに平清盛の「御使」や平教盛の「私の使」が乗っていること、赦免者が鹿瀬庄に入っていることから、宋商と結びつきその活動を支援した権門が、こうした船を「九国」と南島との間の物資や人の運搬船としても利用した可能性も浮上する。

② 『平家物語』諸本の検討

ただし、以上はあくまで一三七一年成立の覚一本から導き出された解釈である。周知のように『平家物語』には数種の伝本があり、それぞれに内容の異同がある。どれが古態を伝えるかについても諸説あるが、その蓋然性があるとされるものに、覚一本が属す略本系の屋代本、広本系

表1 『平家物語』諸本の異同

覚	屋	延	長	四	備考
①	○	○	○	×	「都を出でて」を延・長は「薩摩湯より」とする。
②	○	○	○	×	屋「杵庄」、延「加世庄」
③	○	○	○	○	屋・延・長、波風のため船中にて日を過ごしたとある。
④	○	○	○	×	
⑤	△	○	△	○	屋「宰相～おぼつかなく候に」なし。長、硫黄島から薩摩湯の「房の泊り」に到り、大隅正八幡宮に寄って「かせの庄」へ。
⑥	○	×	×	×	延・長、計百余日で島に到着。
⑦	○	△	△	△	
⑧	○	×	×	△	四「蒲荊船得 _レ 便、移 _二 件嶋 _一 」
⑨	○	○	○	○	延「九国地へ通フ商人ノ船」、四「自ラ商人渡売り」
⑩	○	×	×	×	

※「覚」覚一本、「屋」屋代本、「延」延慶本、「長」長門本、「四」四部合戦本

の延慶本・長門本（兄弟本）、そして四部合戦本などがあげられてきた。¹⁶また『平家物語』諸本は、一般に語り本系と読み本系に大別されるが、覚一本・屋代本は前者、延慶本・長門本・四部合戦本は後者に分類される。語り本系と読み本系は一三〇〇年前後に分岐したとみられるが、古態を残すとされる伝本においても、互いに影響を与えながら後世の改変を受け、姿を変えていることに留意する必要があるという。¹⁶した

がって、覚一本の検討から導き出された「鬼界が島」をめぐる交易者の姿も、そのままでは鎌倉期以前の姿を反映しているとは言えないことになる。

そこで、先にみた覚一本系の①～⑩の記述が、上記諸本に記されているか否かについて確認したのが表1である。¹⁷

この表から明らかのように、諸本は、俊寛の流された島で九州から行き交う商人船が硫黄交易を行っていたとすることで共通する(⑨)。したがってこれは、『平家物語』の基本型であったとしよう。また①～⑩について、屋代本は覚一本とほぼ同じである。すなわち、前節の検討結果について、少なくとも語り本系については覚一本の成立を遡る、つまりは鎌倉期に遡りうる可能性を持ちうることが示唆される。この点は以下に述べる諸本の異同にかかわらず、留意すべき点だと思ふ。

さて問題は、⑥の「もろこし船」への乗船計画が、延慶本・長門本・四部合戦本に見えないことである。そこでまず、延慶本・第二本「有王丸油黄嶋へ尋行事」から、覚一本の「六」に対応する記述を抜き出すと以下のようになる。

父母ニモ知レズ、親者共ニモカクトモイワズ、只一人、都ヲ出テ、遙々トマダシラス、薩摩方ヘゾ下リケル。淀川尻ノ程ヨリ、「油黄嶋ヘハイヅチヘ罷ゾ」ト問ヒ、足ニ任テゾ下リケル。道スガラ、アヤシノ者ノアヒタルニモ、我主モ、カクコソオワスメト思ヒ、或時ハ海上ニ便ヲ求メ、或時ハ山川ニモ迷フ時モアリ。日数ヤウヤウ積リケレバ、百余日計ニ、彼嶋ヘタドリ付ニケリ。

ここでは、有王が俊寛の流された島へ向かうために淀川尻から「百余日」かかったことになっており、渡島に用いた船の情報もない。この部分が長門本だと「淀川尻ノ程ヨリ」が「卯月十日此都を立て、足にまか

せてぞ下りける」となり、「百余日計二」が「百余日をも過て、七月下旬にぞ」となる。要するに「淀川尻」は消えるが、出発・到着の日はより具体的となる。その他は同じである。いずれにしても両本は、船についての情報を記さず、島までの旅路が三ヶ月を超えたとすることで共通する。しかしこれは、四月・五月の「もろこし船」出港にあわせて、三月末に都を出て薩摩に到り、商人船で島に到ったとする覚一本・屋代本と大きく異なるとしなければならない。覚一本・屋代本は、先にみたように薩摩からは「もろこし船」を使い、二ヶ月前後で「鬼界が島」に到達したと読めるからである。また⑩では有王が島から九州へ戻る船を「商人舟」とするが、延慶本・長門本・四部合戦状本ではそれがどのような船であったのかも記していない。

さらに延慶本・長門本では、流人三人が当初は「端五嶋」のうち、それぞれ油黄嶋、しきの嶋、白石の嶋と別々の嶋に配流され、その後他の二人が自力で油黄嶋にたどり着いたとする。これも、最初から「鬼界が嶋」に流されたとする覚一本・屋代本との差が大きい。そうなると、延慶本・第二本「建礼門院御懷妊事付成経赦免事」が、平康頼・藤原成経二名の赦免を伝える船影を流人らが島の磯から遠望する場面で、「是ハ端嶋ノ浦人共ガ、流黄ホリニ時々渡ル事ノアレバ、サニコソ、ト思程二」と記していることが注目される。これは長門本も同様である。つまり両本は、硫黄島に近隣の「端島」の「浦人」も硫黄採掘のために船で来島し、「九国の地へ通ふ商人」と交易を行うという前提に立っていたとみられる。覚一本・屋代本にこうした記述はない。そこで留意されるのは、四部合戦状本が、有王が薩摩からの渡島に使った船を「蒲荊船」、すなわち藻刈の和船として記述していることである。これについては、商人船での渡島を原型とすべきで、四部合戦状本独特の空想だとの指摘がある¹⁸。ただ、こうした「空想」は、有王と「もろこし船」や商人船の関係について記す覚一本・屋代本、さらには中院本といった、語り本系から生じる

ことはあり得ず、延慶本・長門本につらなる読み本系（もしくは広本系）が有王の渡島船の具体像を伝えず、旅の苦労や長さを強調し、かつ島嶼間を結ぶ地元船の存在を描いていることと関係するだろう¹⁹。

有王の用いた船について、今ここで、以上のどちらが史実であったのかを明確にすることはできない。ただ、こうした二つ叙述が語られる背景に、双方の交通の実態が、いずれも鎌倉期に遡って存在していた可能性は考えられて良いだろう。

それでも、延慶本・長門本が、④の対応部分について、俊寛の様子を松浦の「さよ姫」伝承によって例え、かつその船を「唐船」「もろこし船」と表現するのは、覚一本・屋代本と全く異ならない。これは『源平盛衰記』も同じである。つまり、この部分は『平家物語』に早くからあった叙述とみられる。叙述の簡略な四部合戦状本はこの例えの部分が省かれているに過ぎないと考えるべきだろう。

なお、延慶本・長門本によれば赦免を伝える御使が下されたのは七月一日、その後波風が荒くて船中で目を送り、島に到着したのは九月半ばすぎとする。この筋書きも、覚一本・屋代本と一致する。しかもこの二ヶ月程度という時間は、覚一本・屋代本が「もろこし船」を使う有王の旅路を二ヶ月前後でイメージさせることも重なってくる。

また赦免者に乗せた硫黄島からの帰船について、長門本は、九月半ば過ぎに硫黄島を出た船が「さつまがた」の「房の泊り」（坊津か）から大隅正八幡宮へ向かうという独自の話しを展開した後、赦免者らは「かせの庄」に到ったとする。延慶本は、九月半ば過ぎに島を出た後、「浦伝嶋伝シテ、廿三日ト云ニハ九国ノ地ヘ付ニケリ」とあり、次いで平教盛が重ねて派遣した使者の助言に従い、平教盛領である肥前国鹿瀬庄（加世庄）に入ったとする。つまり、これらからは、硫黄島を出た船で直接鹿瀬庄に入ったのではなく、一度、九州南部に着岸後、その船から下りたと読み取れる。一方、覚一本・屋代本・四部合戦状本などにこう

した記述はなく、硫黄島を出た救免者が船でそのまま鹿瀬庄に入ったように読めるが、略本系では薩摩から鹿瀬庄までの経緯が省略されていると考えることもできる。

この鹿瀬庄については、②にも、流人の藤原成経の舅にあたる平教盛が、庄より「鬼界が島」まで、「衣食を常に」運んでいたことが記されている。このことに関し、延慶本・第二本「有王丸油黄嶋へ尋行事」は次のようにある。

一年被レ流シ人ノ内、丹波少将ノ許へ、舅ノ門脇ノ宰相ノ許ヨリ、
一年二二度、船ヲ渡サレシナリ。春渡スハ秋冬ノ衣食ノタメ、秋渡
ハ帰ル年ノ春夏ノ衣食ノタメト渡シヲ、

これによれば、春と秋に平教盛が硫黄島まで船を渡して、流人へ支援物資を送っていたことになっている。年に春秋の二度、支援物資が送られていたとするのは長門本も同様である。硫黄島の九州本島との交流が困難で限定的である以上、「衣食を常に」運ぶとする実態は、せいぜい年二回程度のものであつたらう。そして、さよ姫の見送った「もろこし船」に例えられた船に平教盛の私使が乗船していること③、その船に乗った救免者が硫黄島から鹿瀬庄に到っていることを踏まえると、平教盛による鹿瀬庄から硫黄島への支援物資の運搬にも、「もろこし船」が活用されていた可能性が浮上する。実際、救免を伝える御使が動いたのは七月～九月で、平教盛が硫黄島へ物資を運んだ秋期とも重なっている。

ただし前述のように、延慶本・長門本では、硫黄島から救免者を乗せた船は、九州南部に着岸し、救免者は下船して鹿瀬庄に向かっている。こうしたことから、平教盛とも結びつく「もろこし船」は、鹿瀬庄ではなく、博多もしくは薩摩に寄航する船とすべきかもしれないが、それも、

有王の薩摩からの「もろこし船」の利用をいう覚一本・屋代本と通じる。

③ 薩摩塔の分布とその背景

しかし以上の検討によっても、史実の確定にはなお不安定さが残る。一三世紀前半には成立したとされる『平家物語』を土台とする現存諸本は、前述のように互いに影響を与えながらその姿を変えているからである。けれども九州に分布する中世の薩摩塔は、以上が、少なくとも『平家物語』成立期の歴史実態と理解して矛盾がないことを示す資料といえるだろう。

薩摩塔は、四天王像を彫った須弥壇の上に、宝珠形、花頭窓形の龕に尊像座像を陽刻した壺型の塔身を置き、頂部に反りの強い屋根を施すことを基本構成とした石像物で、福岡・佐賀・長崎・鹿児島に四〇基程度と〔図1〕、特に九州の西北部と南西端部に分布する。またその時期は、『平家物語』の成立期と重なる一三世紀を中心とした年代が与えられている²¹⁾。

注目されるのは、近年の研究によってこの薩摩塔が、中国と結びつくものであることが明らかとなったことである。主な根拠は石材と意匠にある。すなわち、大木公彦氏・高津孝氏・橋口巨氏らの研究グループが、使用石材に中国寧波産梅園石との素材的共通性を確認し、高津氏・橋口氏によって「薩摩塔と共通する屋根(笠)」「仏龕状の意匠を持つ塔身」「須弥壇(須弥座)状の中台・軸・基礎部」等を組み合わせた石塔が浙江省をはじめ中国に多く存在することも指摘された²²⁾。さらに井形進氏によって、薩摩塔に施された四天王像が、日本では他に見られない特異な意匠を持つ一方、中国では広く見られるものであることも確認されている²⁴⁾。井形氏によれば、福岡県糟屋郡久山町の首羅山遺跡の二基の薩摩塔のうち、残存状況の良い西側の四天王像は、いずれも冠・兜等

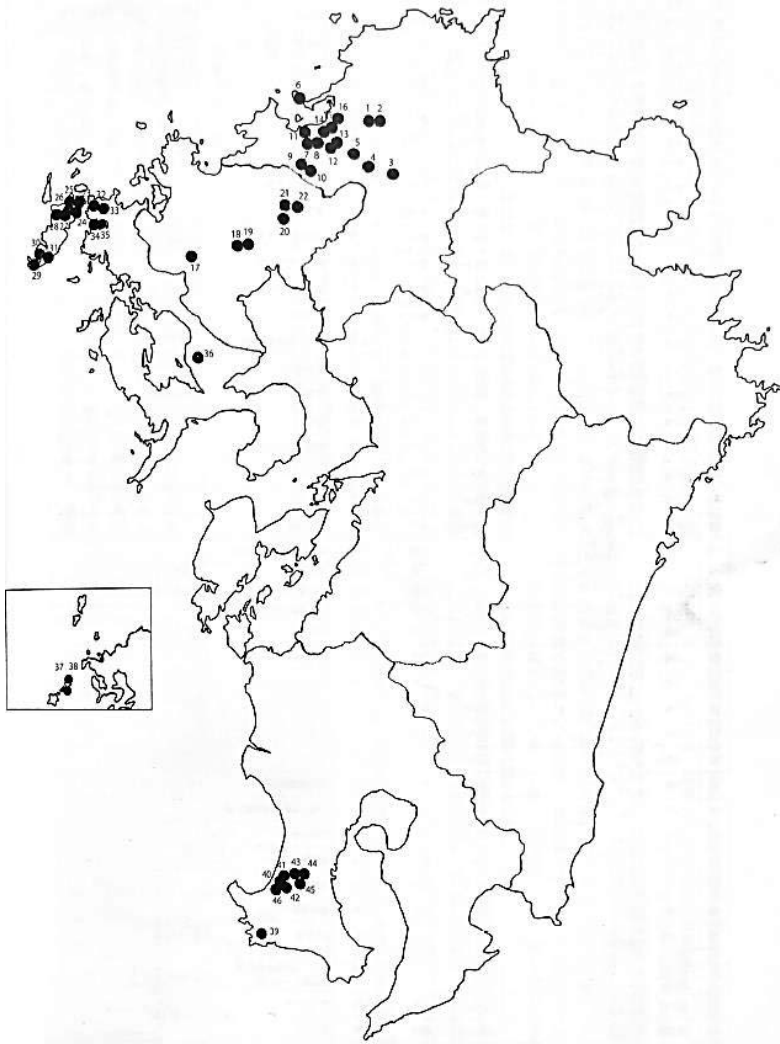


図1 薩摩塔の分布 [江上智恵註(21)論文第1図より]

をかぶり、長裾の甲をまとい、海老籠手や輪を積み重ねたような脛甲、首回りには領巾をつけているが、これと共通する作例が日本では首羅山との関連を想定できない東寺などの兜跋毘沙門天ぐらいしか存在しない一方、中国では類似のものが多く確認できるという。

なお、井形氏が薩摩塔の四天王像と共通性の高いものとして具体的に掲げた中国資料は、蘇州市瑞光寺塔から見出された北宋代の多聞天像、寧波市南宋石刻公園に安置された一二世紀の延寿王寺塔の四天王像である。また現段階で中国とも日本とも直接的な結びつきが確認できないも

のとして、塔身が壺型であること、四天王に甲冑ではなく着物を着たような表現のものがあること、塔身尊像に如来だけでなく如来とし難いものもあることなどをあげ、薩摩塔には仏教以外の信仰、道教ないし神仙思想も入り込んでいるとみる⁽²⁵⁾。

筆者は上記について専門的な評価を行い得ないが、海老籠手に加えて輪を積み重ねたような脛甲を身につけた四天王像としては、井形氏が指摘するものの他、北宋・雍熙二年(九八五)に造立され日本にもたらされた清涼寺釈迦如来像の胎内納入品である版画靈山変相図の多聞天をあ

げることができよう⁽²⁶⁾。また、薩摩塔独自の表現とされる着物を着たような四天王像に關し、浙江省台州市黄岩区の靈石寺塔文物の銅鏡に線刻された「南方天王鏡像」にも襟を重ねた着物姿が表現されていることを確認できる(図2)。この「南方天王」は増長天にあたるが、四天王はいずれも海老籠手のようなものもつける⁽²⁷⁾。さらに薩摩塔の塔身尊像について、如来とし難いものがある点に關しても、首羅山遺跡の西側薩摩塔のようにやや上を仰ぐように合唱した尊像、福岡県糟屋郡の宇美八幡宮付近の個人像薩摩塔のように袈裟をつけた僧形のような尊像は、従来から薩摩塔との共通性が指摘されていた浙江省麗水市の靈鷲寺石塔の塔身に類似の表現があることを指摘してきた⁽²⁸⁾。

このように薩摩塔には、石材からも個々の意匠からも中国の直接的影響が強く認め



図2 霊石寺塔文物の銅鏡線刻「南方天王鏡像」
[奈良国立博物館註(27)より]

られる。けれども問題は、現段階において、壺型塔身のような、薩摩塔と完全に一致する構成・様式を備えた石塔が中国では未確認だということである。この点で薩摩塔は、日本列島独自の展開も考えるべき資料ということになる。しかし、その分布空間が前述のように九州西部に限られること、またその後の日本の石造物意匠に直接影響を与えた痕跡も認められないことなどを踏まえると、受容の中心主体を在来日本人に求めることは困難である。中国的な石材や意匠に加え、博多や平戸といった中国海商船の往来する地域に特に集中することを踏まえれば、薩摩塔にはこれまで指摘されてきたように中国系商人との関係を想定するのが妥当であろう³⁰⁾。つまり、二三世紀を中心とする時期が与えられる薩摩塔は、『平家物語』でイメージされる九州西北部―薩摩―硫黄島を往還する

「もろこし船」とも結びつきうる、『平家物語』成立期の同時代資料としての位置づけを与えうるものなのである。そこで、薩摩塔分布地域の周辺環境についてさらに確認しておきたい。現在、薩摩塔は福岡県、佐賀県、長崎県、鹿児島県で確認されているが、なかでも福岡県と長崎県はそれぞれ十数点と数も多い。このうち、福岡県においては、宝満山伝来の一点を除き、博多湾岸、もしくは博多湾を囲む山岳地帯に集中している。一方、長崎県においては、大村湾東南部の大村市龍福寺跡の一点、五島列島に属する佐世保市宇久島の二点がある他は、平戸市に集中している。以上のうち博多や宝満山、平戸の薩摩塔については、史料からも中国系商人との関係が想定しうる状況にあり、ここであらためて確認する必要はなからう。また二点の薩摩塔が確認された宇久島は、五島列島北端の島で、承和の遣唐使で入唐した円仁の日記『入唐求法巡礼行記』承和五年(八三八)六月二十三日条に、博多津を出発して唐へ向かう遣唐使船が、この島で見送りの人らと別れたとあるように、日中を往還する船の寄港地の一つとなっていたとみられる。同島では、多くの貿易陶磁を出した宇久山本遺跡も注目される³²⁾。

一方、大村市龍福寺跡の薩摩塔は、上記のような外洋に面した地域ではなく、大村湾東南岸地域に所在し、海商船の寄港を直接裏付ける史料も見当たらない。しかし近年、この近くで注目すべき遺跡が確認された。大村市の郡川河口部に位置する縄文晩期～中・近世の複合遺跡、竹松遺跡である³³⁾。本遺跡からは、古代・中世遺構では区画溝、総柱建物、側柱建物、四面庇建物、倉庫群などが確認され、遺物では緑釉・灰釉陶器の他、宋銭、湖州六花鏡、越州窯系青磁Ⅲ類などの優品を含む九〇一三世紀を前後する時期の多くの中国陶磁器、高麗青磁、朝鮮製無釉葉

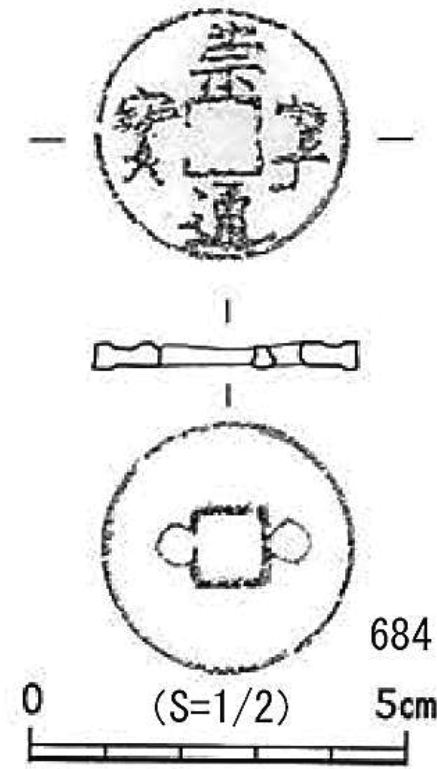


図3 竹松遺跡出土崇寧通宝

[長崎県教育委員会註(33)『竹松遺跡Ⅱ』より]

陶器などの渡来文物が出土している。

竹松遺跡の渡来文物の搬入ルートは必ずしも明確でなく、遺跡全体の性格も不明な点が多いが、本稿の観点からはまず、朝鮮製無釉陶器の破片が二五〇点以上出土していることが留意される。朝鮮製無釉陶器は日本では北部九州を中心に出土するが、無釉陶器は貿易品として生産されたものではなく主に調理、貯蔵、運搬に用いられたものとされ、長崎県内出土の朝鮮製無釉陶器は、その分布状況や共伴遺物との関係から、渡来海商と関連する遺物と理解されている⁽³⁶⁾。安貞二年(一二二八)三月十三日「関東下知状案」(『鎌倉遺文』六一三七三三)には、肥前国松浦郡の有力領主清原是包が来着した高麗船から積み荷を奪い、仁平二年(一一五二)に宇野御厨領家に小値賀嶋の知行を解却されたとあり、肥前西部では実際に高麗船の寄港もあった。

本遺跡の渡来遺物としてもうひとつ注目したいのは、出土宋銭のなかに「至道元宝」「天聖元宝」の他、日本ではほとんど流通が確認されな

い大銭に属する「崇寧通宝」が存在することである。しかも崇寧通宝の中央方孔の両脇にはそれぞれ円形の小穴が穿たれている(図3)。アジアの銭貨流通を詳細に検討した三宅俊彦氏によれば、日本において大銭は流通銭としては流入せず、方孔とは別の穿孔のある大銭は、サハリン及び北海道で確認され、中国の大銭を装飾に用いる北方の特徴的な文化と理解されるといふ⁽³⁶⁾。したがって、竹松遺跡の有孔大銭も、こうした東北アジアの北方文化に由来する可能性が極めて高い遺物との評価を与えることができるだろう。

このように貿易陶磁の優品だけでなく、多くの朝鮮製無釉陶器、さらには北方文化に属する有孔大銭が本州を飛び越えて確認される本遺跡を、列島沿岸・内陸伝いの国内交易者の動きだけで説明するのは困難である。もともと肥前西部は大村湾東岸、竹松遺跡北方の白井川遺跡から「綱」と墨書した白磁腕が出土したこと等から、博多を拠点とする海商との関連性が想定されていた⁽³⁷⁾。竹松遺跡の調査によって、大村湾内にも渡来海商船が入っていた蓋然性が一気に高まったといえる。しかも本遺跡においてこうした様相は一一世紀から一二世紀に強くあらわれており、渡来海商とつながる当地の環境は薩摩塔に先行して形成されていたと考えられる。またこれは、博多湾の交易拠点が鴻臚館から博多遺跡群へと移行し、博多に居留する中国系商人の活動が活発化する時期とも重なる。

なお長崎県では、以上の薩摩塔の他、大村湾と佐世保湾をつなぐ位置にある佐世保市針尾中町小鯛城跡墓地にも薩摩塔の笠かたされる石塔の一部が報告されていて、これが薩摩塔であれば、大村湾に入る海商船との関連性も想定されよう⁽³⁸⁾。

問題は、史料からは海商船の動きがほとんどつかめない佐賀県や鹿児島県の薩摩塔の評価である。このうち佐賀県の薩摩塔は、武雄市から神崎郡吉野ヶ里まで、筑後川北部の背振山地に集中し、

山岳信仰との結びつきも察せられるが、これが有明海に海商船が寄港したことを示唆するものなのか、薩摩塔が濃く分布する博多や肥前西部との内陸交通や交流から捉えるべきなのか、現段階では明確にできない。ただ、鹿児島県に分布する薩摩塔については、その多くが万之瀬川流域に所在し、周辺の遺跡との関係から、これらに渡来海商との関連性を想定する見解がいくつか出されている。

すなわち柳原敏昭氏は、薩摩半島中部を東シナ海にそぐ万之瀬川の河口付近がキカイジマ海域に支配を及ぼした薩摩平氏の阿多氏の本拠地で、ここが肥前とも結びついた地域内の物資の集散地でもあったことを指摘する⁽³⁹⁾。さらに、薩摩塔の分布がトウボウ地名分布と重なり、かつ鹿児島では万之瀬川流域に集中すること、万之瀬川沿岸に一二世紀から一三世紀を中心とする中国陶磁や徳之島産カムイヤキ、西彼杵半島産の滑石製石鍋を含む列島各地の土器・遺物が出土した持鉢松遺跡があること、博多遺跡群でも検出された一二世紀後半の寧波系瓦が出土する渡畑遺跡も存在することなどから、薩摩塔と中国人の渡来・居留との関連性を想定する⁽⁴⁰⁾。また橋口巨氏も、万之瀬川流域に薩摩塔・宋風獅子が濃厚に分布すること、この流域で薩摩塔の出土した芝原遺跡に隣接する渡畑遺跡で寧波系瓦も出土したことなどを根拠に、当地域では宋人居留の想定が可能な状況だとし、残存条件に地域的な差の生じる文献史料から導かれた日中交通における薩摩絡みの日中交通ルートの評価を、こうした考古資料から見直すべきことを主張している⁽⁴¹⁾。

ただし、当地に宋人居留があったとまで評価できるかどうかは、今後の検討をもう少し待ちたいと思う。文献史学からは、「トウボウ」地名の分布と宋海商の居留とを直接結びつけることに厳しい批判がある⁽⁴²⁾。考古学からも大庭康時氏が、持鉢松遺跡において海商船の寄航による貿易が行われたことは認めつつも、博多遺跡群との差異から、少なくとも一三世紀前半以前、当地に中国系商人の居留地が築かれた可能性は低い

と指摘している⁽⁴³⁾。万之瀬川流域で「綱」銘墨書が確認されないことから、現在のところ、こうした批判を大きく覆すような史料が確認されているとまでは言いがたい。それでも、寧波系瓦の時期や貿易陶磁を多く出す持鉢松遺跡の盛期が薩摩塔の時期にやや先行することは、先の大村湾の竹松遺跡も同様で、海浜地区の薩摩塔は、こうした環境を前史に持つ地域にある。中国の直接的な影響を受けた薩摩塔の信仰は、一二世紀以前から海商船の寄港が想定しうる地域空間に限定的に「共有」されているのである。

そこで注目されるのは、先の竹松遺跡において、石鍋を含む大量の滑石製品とともにカムイヤキ片が二四点出土したことである。南西諸島にも運ばれた滑石製品は、大村湾対岸の西彼杵半島で生産されたから、これ自体は肥前地域の生産・流通の問題としても解釈し得る。しかし奄美諸島の徳之島産のカムイヤキについては、これまで確認されていた北方への広がりや鹿児島県出水市から大きく北上させるものとなった。つまりカムイヤキの出土は、竹松遺跡が、西彼杵半島産の滑石製石鍋の流通圏と関連し、南島ともつながる交易ルートに結びつく遺跡であったことを物語るものなのである。そうなると、ここが南西諸島に盛んに運ばれた滑石製石鍋の産地に近く、産地からの石鍋の集積や産地工人への物資支給を行った地域と想定されることが無視できない⁽⁴⁴⁾。竹松遺跡へのカムイヤキの搬入は、当地が南西諸島に運ばれた滑石製石鍋生産の拠点の一つであったことと無関係ではないだろう。

この問題と関連し、『高麗史』宣宗十年（一〇九三）七月癸未条に、武器ともに水銀・真珠・硫黄・法螺等を積んだ宋人・倭人の混交船が高麗国に拿捕されたとあることがあらためて留意される。本船は、宋海商の高麗への渡航が禁止されるなか（一〇九〇―一〇九四）、日本から契丹へ向かう宋海商主体の商船とみられているが、交易品に加えられた硫黄・法螺は南島の代表的な産品である。一方、真珠は少なくとも明代の

中国では五島が代表的な産地と認識されており、そこにもそれ以前の前史があるだろう。⁽⁴⁶⁾ また『百鍊抄』や『中右記』によれば、寛治六年（一〇九二）、大宰権帥や対馬守の指示を受けた日本商人僧明範が、宋海商の案内のもと、日本の武器と契丹の銀を交易したことが発覚し、処罰を受ける事件も発生している。⁽⁴⁷⁾ これらと同時代の遺跡で、北方文化に属する有孔大銭や大量の朝鮮製無釉陶器、中国陶磁、カムイヤキなどが出土する竹松遺跡には、以上のような宋・高麗・契丹・南島の交錯する海域の交流状況が直接反映されている可能性が高い。

また、後世の史料であるが、遣明船に使僧として乗り込んだ日本僧の日記『笑雲入明記』にも注目される記事がある。これによれば、宝徳三年（一四五二）八月十八日に博多を出た船は、その日のうちに志賀島に着き、志賀海神社の神宮司である吉祥寺に安置された文殊菩薩像を礼拝した。薩摩塔はその志賀海神社のすぐ北方の火焰塚でも確認されている。志賀海社は、『小右記』万寿四年（一〇二七）八月二十七日条に、社司が「唐船」に乗船し日宋間を往還したことが記されており、宋商との関係も深い。『入唐求法巡礼行記』承和五年（八三八）六月十七日条でも承和の遣唐使が風待ちのためにここに五日間停泊しているから、薩摩塔がこうした風待ちで寄港する船人の信仰対象であったことが察せられる。さらに遣明使一行は、五日後には志賀島を発し平戸島の満福道場に入ったが、今度はそこに硫黄を運ぶ薩摩船がやってきている。これは、日明貿易の最大の輸出品である硫黄が、島津氏によって運ばれたものと理解されており、⁽⁴⁸⁾ 平戸が、博多と中国を結ぶ航路と、薩摩から硫黄を運ぶ航路の交点の寄港地たりえたことが示されている。

一方、硫黄島についても、『平家物語』諸本が、例えば流人二名に赦免を伝える船が硫黄島へ渡る際も、「波風」が妨げて大きな日数を要したとするように（表1③）、波風の条件が整わなければ九州島との交通が困難だと強調していることが留意される。つまり、九州から硫黄島へ

渡る船は波風に適した時季をうかがわねばならず、この点において、薩摩への寄港や風待ちを必要としていたはずなのである。そして薩摩塔の集中する万之瀬川流域は、持鉢松遺跡に先行する九世紀中頃操業の中岳山麓窯跡群の須恵器に熊本県荒尾窯跡群の影響が想定され、それが奄美諸島へも供給されていたように、⁽⁴⁹⁾ すでに平安前期から九州西部沿岸地域と南島を結ぶ拠点の一つとなっていたことも間違いない。

以上を踏まえた上で、あらためて『平家物語』の記述について考えてみたい。すでにみたように『平家物語』には、九州島と硫黄島を往還して硫黄交易にもかかわり、日本の権門も利用しようするような「もろこし船」の存在を前提としていると読むべき記述がある。このように日本の権門とつながり中国的な船を動かした勢力としては、権門・寺社をパトロンに「日本商人」とも呼ばれて日宋貿易に従事した博多居留の中国系商人が知られる。⁽⁵⁰⁾ けれども文献史学では、彼らが日宋貿易を行う一方、国内流通は日本の特権集団、商人・運送業者が担い、その両者を有力権門・寺社が組織して、博多が国際・国内流通の結節点となったとする構図がある程度論証されている。⁽⁵¹⁾ 宋商人船の博多以外での交易活動に否定的な見解は、こうした基本モデルに対する理解を背景としている。

けれども薩摩塔に目を向けるならば、『平家物語』の「もろこし船」は無視し得ないものとなる。薩摩塔は、日中交易の起点となる博多、南島交易の拠点となる薩摩、そしてその日中交易・南島交易の航路が交差する肥前に偏在する。薩摩塔の信仰がこうした地域空間に限定的に共有された社会関係が、少なくとも『平家物語』の成立した一三世紀頃に実在していたことを認めねばならない。しかもその信仰対象となった石塔の大半は、中国の輸入石材を用い、他の日本石塔とは一線を画した中国的意匠で覆われながら、一方で中国大陸と異なる独自性も備える二面性を持つ。当時の日本において、こうした薩摩塔の二面性と対応しうる主体は、長期にわたって日本に生活基盤を置き、日本の寺社とつながりな

から宗教活動も行った中国系商人以外に見当たらない⁽⁵²⁾。薩摩塔を含む九州の搬入系石造物には日本木造建築の要素の反映が看取されるとの指摘もあり⁽⁵³⁾、これらの分布には日本に長く住み中国的な文化・信仰を維持した人々の共通した関与がうかがわれるのである。一三世紀は博多遺跡群の様相が変化し、その中頃に博多綱首は消滅したとする指摘がある⁽⁵⁴⁾。一方で、以後も博多綱首の流れを引く海商が貿易にたずさわったとする説もある⁽⁵⁵⁾。薩摩塔が広がったとされる一三世紀は、この博多遺跡群の変化の時期とも重なり、中国系商人の居留地の変化・拡散がこの頃起こった可能性も考えられない。しかしいずれにしても、薩摩塔の周辺遺跡からは、薩摩塔に示される渡来系商人と九州西海岸地域の関係が一二世紀以前、すなわち『平家物語』が題材とした平氏政権以前に遡る交流・交易環境を引き継いだものであることは認めるべきだろう。

万之瀬川流域の薩摩塔の様態も中国の石塔とは直接結びつかないが、平戸や博多の薩摩塔とは完全に一致する。薩摩塔に先行する万之瀬川流域の寧波系瓦も、薩摩塔同様、中国系商人の居留地が形成された博多遺跡群で出土するものでもあるのだから、その背景に、まずは南島交易にかかわり当地を重要な寄港地とした博多の中国系商人とのつながりを疑うべきではないかと考えるのである。

むすび

以上、『平家物語』の「もろこし船」や、薩摩塔及びその周辺遺跡の検討から、古代末・中世前期、中国系商人の船が博多と中国を往還するだけでなく、南島へも向かい硫黄交易に加わっていたこと、肥前や薩摩はそのための重要な寄港地ともなっていたこと、この主体の中心は日本居留の中国系商人であった可能性が高く、彼らを支援する日本の権門・有力層のなかに、その船を物資や人の運搬に利用するものもあったと考

えられることを述べた。

ところで渡邊誠氏は、帆走を主とするジャンク式構造船の半分程度しかない準構造船の和船は横風や逆風に弱く、島嶼部の狭い海峡を順潮に乗り航行する瀬戸内海航路などには向いていても、東シナ海の横断に向きであったことを指摘する⁽⁵⁶⁾。そうであれば、南島航路については、『平家物語』も語るように、瀬戸内海航路などのような一般国内航路とは比較にならぬ困難さがともなっていたことも留意したい。近世薩摩藩の奄美支配の和船ですら、薩摩・奄美間の難所「七島灘」を越えるには貧弱で、破船、漂流、座礁を恐れ、台風の季節や冬期季節風期の航行を忌避していた⁽⁵⁷⁾。ところが現在の考古学の知見を踏まえても、これを大きく遡る平安・鎌倉期に、九州から南島へ直接的な交易路は、硫黄島どころか「七島灘」を越えて、喜界島までは確実に延びている。ここに、瀬戸内海航路などとは異なり、特に南島交易路において外洋航海に長けた渡来海商の船が求められる条件があったと考える。南島交易において宋海商の船は、和船を圧倒する安定性・安全性をもたらしているのだからである。博多の中国系商人の支援者として国際交易にかかわった権門・寺社などの日本有力層が、国際交易とも結びつきの深い南島との交通・交易に「もろこし船」を利用する背景も、こうしたところにあつたのではなからうか。また中国系海商にとっても、硫黄や螺などの南島交易品は日本での交易の大きな関心事であったから、それを引き受けるメリットがあつたと考えられる。これらが、後の中国大陸と琉球列島を直接結ぶ中国海商船登場の背景の一つともなったのではなからうか。

註・引用文献

- (1) 田中史生 「七〜一世紀の奄美・沖縄諸島と国際交易」(同『国際交易と古代日本』吉川弘文館、二〇一二年、同『国際交易の古代列島』(角川選書二〇一六年)、同『国際交易と列島の北・南』(『古代東ユーラシア研究センター年報』二、二〇一六年)。
- (2) 山内晋次 「平安期日本の対外交流と中国海商」(同氏著『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館、二〇〇三年)、同『日宋貿易と「硫黄の道」』(山川出版社、二〇〇九年)、同『日本史とアジア史の一接点―硫黄の国際交易をめぐって―』(『江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―』(上海シンポジウム 2011) 国際日本文化研究センター、二〇一二年。以下、特に断らない限り、山内氏の見解はこれらによる。
- (3) 渡邊 誠 「平安・鎌倉期「唐船」考」(『九州史学』一七〇、二〇一五年)。
- (4) 山内晋次 「荘園内密貿易説に関する疑問」(同氏著前掲註(2)) 『奈良平安期の日本とアジア』。
- (5) 例えば渡邊誠 『平安時代貿易管理制度史の研究』(思文閣出版、二〇一二年)、大場康時 『博多の考古学―中世の貿易都市を掘る―』(高志書院、二〇一九年) など。
- (6) 桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理 「九州発見中国製石塔の基礎的研究―所謂「薩摩塔」と「梅園石」製石塔について―」(『福岡大学考古資料集』四、二〇一一年)、橋口 亘 「薩摩南部の中世考古資料をめぐる諸問題―薩摩塔・宋風獅子・貿易陶磁・清水磨崖仏群・硫黄交易―」(『鹿兒島考古』四四、二〇一四年) など。
- (7) 榎本 涉 「宋元交替と日本」(大津透他編『岩波講座 日本歴史』七、岩波書店、二〇一四年)。なお、『島津家文書』の二世紀の終わり頃とみられる「五月十四日付源頼朝袖御教書案」には、「唐船着岸物」が大宰府によって「押取」されたとする「島津庄官」の訴えが島津荘領主の近衛其通を介して幕府に届いたことが記されている。従来、この唐船は島津荘に来港あるいは漂着した宋商船と理解されてきたが、石井正敏「年未詳五月十四日付源頼朝袖御教書案について―島津荘と日宋貿易―」(『高麗・宋元と日本』《石井正敏著作集 3》勉誠出版、二〇一七年) は、博多津の唐船の積み荷をめぐる事件と解すべきとする。
- (8) 平安期、管理交易を終えて博多を出た海商船が、その帰路の列島寄航地で交易を行い得たことについては、田中史生「国際交易者の実像―史実と古代文学―」(同編『古代日本と興亡の東アジア』《古代文学と隣接諸学 1》竹林舎、二〇一八年)。
- (9) 永山修一 「文献から見たキカイガシマ」(池田榮史編『古代中世の境界領域―キカイガシマの世界―』高志書院、二〇〇八年)。
- (10) 梶原正昭・山下宏明校注 『平家物語』上(新日本古典文学大系四四、岩波書店、一九九一年)。
- (11) 『肥前国風土記』松浦郡条・褶振嶺にも「大伴狭手彦連、発船渡」任那一之時、弟日姫子登」此、用、褶振招。因名「褶振峯」とある。
- (12) 渡邊 誠 前掲註(3) 論文。
- (13) 石井正敏 前掲註(7) 論文。
- (14) 山内晋次 「平氏と日宋貿易―通説的歴史像への疑問―」(『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』六、二〇一二年)、同『NHKさかのぼり日本史 外交篇』(9) 平安・奈良(NHK出版、二〇一三年)。
- (15) 麻原美子 「伝本研究」(同氏著『平家物語世界の創生』勉誠出版、二〇一四年) 参照。
- (16) 松尾葦江 「諸本論との付き合い方―平家物語研究をひらく―」(『中世文学』六〇、二〇一五年)。
- (17) 屋代本は麻原美子・春田 宣・松尾葦江編『屋代本高野本対照平家物語』(新典社、一九九〇年)、延慶本・長門本は麻原美子・小川栄一・大倉 浩・佐藤智広・小井土守敏編『平家物語長門本延慶本対照本文』(勉誠出版、二〇一一年)、四部合戦本は慶応義塾大学附属研究所道文庫編『四部合戦本平家物語』(汲古書院、一九六七年) を用いた。
- (18) 佐伯真一 「四部本平家物語試論」(『軍記と語り物』二〇、一九八四年)。
- (19) 読み本系に属する『源平盛衰記』に有王の「もろこし船」の乗船計画がみえるのは、語り本系もしくは略本系の影響によるものであろう。
- (20) 永山修一 「キカイガシマ・イオウジマ考」(笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』下巻、吉川弘文館、一九九三年) は、薩摩の阿多平氏と肥前彼杵氏とに系譜的關係が認められることなどから、肥前国の鹿瀬庄からキカイガシマの配流者への衣食の運搬も、北部九州―南九州―キカイガシマの交通関係を前提としていたのではないかとする。
- (21) 井形 進 「薩摩塔の研究序説」・江上智恵 「薩摩塔編年試論―考古学の見地から―」(『平成二六・二九年度科学研究費補助金(基盤研究C) 研究成果報告書』〔課題番号・二六三七〇一五五、研究代表者・井形 進(九州歴史資料館) 二〇一八年〕。このうち薩摩塔の分布については、江上智恵 「薩摩塔編年試論―考古学の見地から―」の「第1表 薩摩塔と称される石塔一覽」を参照した。
- (22) 大木公彦・古澤 明・高津 孝・橋口 亘・内村公大 「日本における薩摩塔・礎石の石材と中国寧波産石材の岩石学的特徴に関する一考察」(『鹿兒島大学理学部紀要』四三、二〇一〇年)、高津 孝 「薩摩塔と礎石―浙江石材と東アジア海

- 域交流―(前掲註(2)「江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―」など。
- (23) 高津 孝・橋口 亘「薩摩塔小考」(『南日本文化財研究』七、二〇〇八年)。
- (24) 井形 進「薩摩塔の時空―異形の石塔をさぐる―」(『花乱社選書』二〇二二年)。同「首羅山遺跡の薩摩塔と宋風獅子」(前掲註(21)報告書)。
- (25) 井形 進 前掲註(24)書。
- (26) なお寧波博物館には、出土地は不明ながら、胛甲が重輪状でない以外は共通する四天王の彫像がある梅園石製の宋代の石塔の部材が展示されている(二〇一八年一月筆者確認)。石材と時期については寧波博物館副館長(当時)の李軍氏より教示を得た。
- (27) 奈良国立博物館『特別展聖地寧波』(二〇〇九年)「作品解説」二九参照。
- (28) 呉 志標「浙江麗水靈鷲寺石塔」(『東方博物』第三〇輯、二〇〇九年)参照。
- (29) 佐藤聖聖「造形・技術・石工の日中交流」(市村高男編『中世石造仏の成立と展開』高志書院、二〇二〇年)。
- (30) 高津 孝 前掲註(22)論文、桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理 前掲註(6)論文、井形 進 前掲註(24)書など。
- (31) 桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理 前掲註(6)論文など。なお、平戸島・五島列島に寄港する唐商が貨物に加える香葉の採取、石の加工を行っていたことは『三代実録』貞観十八年(八七六)三月九日条にみえる。また平戸が日宋交通の重要な寄港地の一つで、ここに拠点築いた宋海商もいたことは榎本 渉「東シナ海の宋海商」(『荒野泰典・石井正敏・村井章介編』『通行・通商圏の拡大』『日本の対外関係3』吉川弘文館、二〇一〇年)も参照。
- (32) 長崎県宇久町教育委員会『宇久山本遺跡』(宇久町文化財調査報告書 第三集(一九九七年))。
- (33) 以下、竹松遺跡については、川畑敏則・堀内和宏「大村市竹松遺跡の調査概要(古代―中世)」(9)11世紀における大村湾海域の展開」発表要旨集・基本資料集、長崎県考古学会、二〇一六年)、長崎県教育委員会『竹松遺跡』(『長崎県文化財調査報告書第二四集』(二〇一七年)、長崎県教育委員会)、『竹松遺跡Ⅰ』(『新幹線文化財調査報告書第四集』(二〇一七年)、長崎県教育委員会)、『竹松遺跡Ⅱ』(『新幹線文化財調査報告書第五集』(二〇一七年)、長崎県教育委員会)、『竹松遺跡Ⅲ』(『新幹線文化財調査報告書第六集』(二〇一八年)、長崎県教育委員会)、『竹松遺跡Ⅳ』下巻(『古代・中世編』『新幹線文化財調査報告書第一集』(二〇一九年)、長崎県教育委員会)、『竹松遺跡Ⅴ』(『新幹線文化財調査報告書第二二集』(二〇二〇年)参照)。
- (34) 山本信夫「東南アジア海域における無釉陶器」(『貿易陶磁研究』二二三、二〇〇三年)。
- (35) 江上正高「門前遺跡未報告資料について」(長崎県教育委員会『門前遺跡Ⅲ 武辺城跡Ⅱ』(『長崎県佐世保文化財調査報告書第五集』(二〇一〇年))。
- (36) 三宅俊彦「10―15世紀東ユーラシアにおける銭貨流通」(『東洋史研究』七七―二、二〇一八年)。
- (37) 大庭康時「集散地遺跡としての博多」(同氏著前掲註(5)書、宮崎貴夫「長崎県地域の貿易陶磁の様相―肥前西部・志岐・対馬」(『貿易陶磁研究』一八、一九九八年)。
- (38) 佐世保市史編さん委員会編『佐世保市史』通市編・上巻(佐世保市、二〇〇二年)第三編第六章(大石久執筆)。
- (39) 柳原敏昭「中世の交通と地域性」(前掲註(7)『岩波講座 日本歴史』七)。
- (40) 柳原敏昭「中世初期日本国周縁部における交流の諸相」(『古代ユーラシア研究センター年報』三三、二〇一七年)。
- (41) 橋口 亘 前掲註(6)論文。
- (42) 山内晋次「日宋貿易と「トウボウ」をめぐる覚書」(中島楽章・伊藤幸司編『寧波と博多』汲古書院、二〇一三年)、渡邊 誠「大宰府の「唐坊」と地名の「トウボウ」」(同氏著前掲註(5)書)。
- (43) 大庭康時 前掲註(37)論文、同「博多遺跡群の発掘調査と持株松遺跡」(『古代文化』五五、二〇〇三年)。
- (44) 杉原敦史「滑石製石鍋の流通について―中世における長崎県本土部の港津の機能から―」(『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』六、二〇一六年)、川畑敏則「過年度の滑石製品と滑石未製品について」(前掲註(33)『竹松遺跡Ⅴ』)。
- (45) 李 領「院政期の日本・高麗交流に関する一考察」(同氏著「倭寇と日羅開探史」東京大学出版会、一九九九年)、原美和子「宋代海商の活動に関する一試論―日本・高麗および日本・遼(契丹) 通交をめぐる一試論」(小野正敏他編『中世の対外交渉場・ひと・技術』高志書院、二〇〇六年)。
- (46) 田中史生 前掲註(8)論文。
- (47) 森 公章「劉琨と陳詠―来日宋商人の様態―」(同氏著『成尋と参天台五臺山記の研究』吉川弘文館、二〇一三年)。
- (48) 村井章介・須田牧子編『笑雲入明記』(平凡社、二〇一〇年)、伊藤幸司「硫黄」(村井章介編『日明関係史研究入門―アジアのなかの遣明船』勉誠出版、二〇一五年)参照。遣明船の主要な航路上にあたる関門海峡地域、博多湾地域、平戸、五島列島には硫黄を保管する施設があったという。
- (49) 中村直子・篠藤マリア編『中岳山麓窯跡群の研究』(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター、二〇一五年)。
- (50) 榎本 渉「宋代の「日本商人」の再検討」(同氏著『東アジア海域と日中交流―九―一四世紀』吉川弘文館、二〇〇七年)。
- (51) 林 文理「博多綱首の歴史的位置―博多における権門貿易―」(大阪大学文

学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』清文堂、一九九八年）、渡邊 誠
「十二世紀の日宋貿易と山門・八幡・院御廐」(渡邊 誠 前掲註(5)書)。

(52) 桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理 前掲註(6)論文も、薩摩塔の所在位置の史的環境から、薩摩塔と博多居留の中国系商人との関係を想定する。なお中国と異なる薩摩塔の独自性については、薩摩塔が石材として搬入され、博多や平戸、坊津などに居住する中国人もしくは中国系石工によって最終的に加工された可能性を想定する。

(53) 佐藤亜聖 前掲註(29)論文。

(54) 大庭康時 「博多綱首の時代 ―考古資料から見た住蕃貿易と博多―」(同氏著 前掲註(5)書)。

(55) 榎本 涉 前掲註(50)論文。

(56) 渡邊 誠 前掲註(3)論文。

(57) 箕輪 優 「享保十三年「大島規模帳」に関する考察 ―薩摩藩の奄美諸島支配について―」(『常民文化』三九、二〇一六年)。

〔付記〕 本稿脱稿後、伊藤幸司『中世の博多とアジア』(勉誠出版、二〇二二年)が公刊された。本書第二章に新稿として収載の「中世博多の海商と海の道―南島路をめぐって―」は、従来の文献史学・考古学の研究成果を整理し、一二世紀から一三世紀の博多―奄美の域内流通では博多在住の宋海商の往来があったとみる。本稿の結論とも重なるもので、併せて参照されたい。

(早稲田大学文学学術院・国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇二二年三月一六日受付、二〇二二年七月二七日審査終了)

“*Heike Monogatari*” and *Satsuma-tō*: Chinese Merchant Ships and South Kyushu

TANAKA Fumio

In The ancient and medieval Japanese history studies, international trade in South Kyushu during the Heian–Kamakura period was thought to have been conducted by Japanese merchants who traded at Hakata’s trading port. However, in recent years, archeology has presented some evidence that The Sung merchants (Chinese merchants) have visited South Kyushu. It is also pointed out that the Chinese trade ships that visited South Kyushu traded sulfur produced here. Therefore, this paper examined the “*Heike Monogatari*” (The tale of the Heike) in the Kamakura period and the 13th century *Satsuma-tō* (薩摩塔). “*Heike Monogatari*” is a war chronicle between the Taira clan and Minamoto clan for control of Japan at the end of the 12th century in the Genpei War. In the “*Heike Monogatari*”, there is a description of sulfur trade in South Kyushu. The *Satsuma-tō* is a stone monument of the same period as the “*Heike Monogatari*”, and is distributed in the northwestern and southwestern parts of Kyushu. These stone monuments are said to have been brought to Japan from China. As a result of the analysis, the following points; (1) Among the Sung merchant ships that visited Hakata during the Heian-Kamakura period, there were ships headed to South Kyushu for trade. (2) Many of the Sung merchants who traded in Southern Kyushu are considered to be the people who lived in Japan. (3) Some of Japanese rulers who support the trade activities of Sung merchants used Chinese trade ships calling at Hakata and Satsuma as cargo carriers for goods and people. It is probable that the above had the following background. One is that the route connecting Satsuma and the South Island is incomparably more difficult than the general domestic route, and there was a need for a ship of a migrant sea merchandiser who was good at ocean voyages. Second, it is believed that the sulfur-containing South Island trade had been an important concern for trade with Japan for Chinese merchants as well.

Key words: “*Heike Monogatari*”, *Satsuma-tō*, Sung merchant, South Kyushu, sulfur